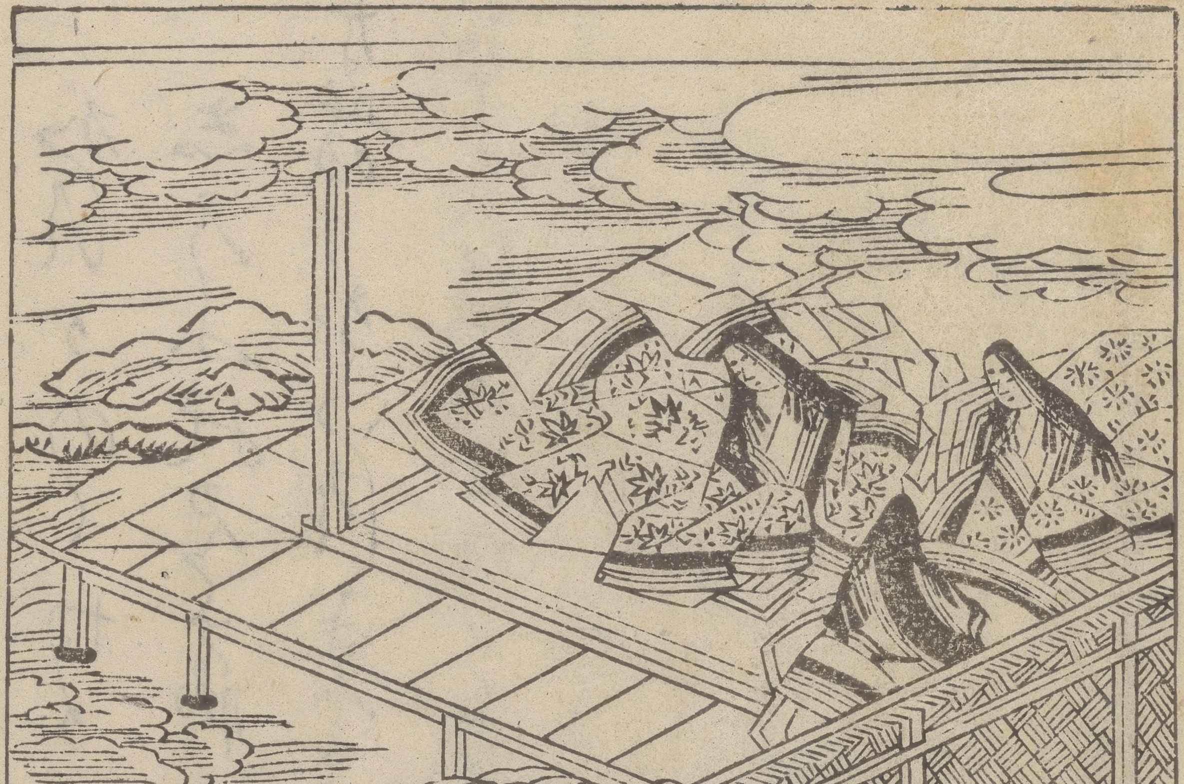
むかしおとこうゐかうふりしてならの
京かすかの里にしるよしゝてかりに
いにけりその里にいとなまめいたる女
はらからすみけりこのおとこかいまみて
けりおもほえすふるさとにいとはした
なくてありけれは心地まとひにけり
男のきたりけるかりきぬのすそをきりて
うたをかきてやるそのおとこしのふすり
のかりきぬをなむきたりける

かひりのくかのむきゝ紀乃すわ衣
志乃ふ此君こ聴りふかしうまん
となまをいはきそいひや里にあるはいそ
おもしろ紀うりともやおもひけん



みちのくの忍ふもちすりたれゆへに
乱れそめにしわれならなくに
といふうたの心はへなり昔人はかく
いちはやきみやひをなんしける

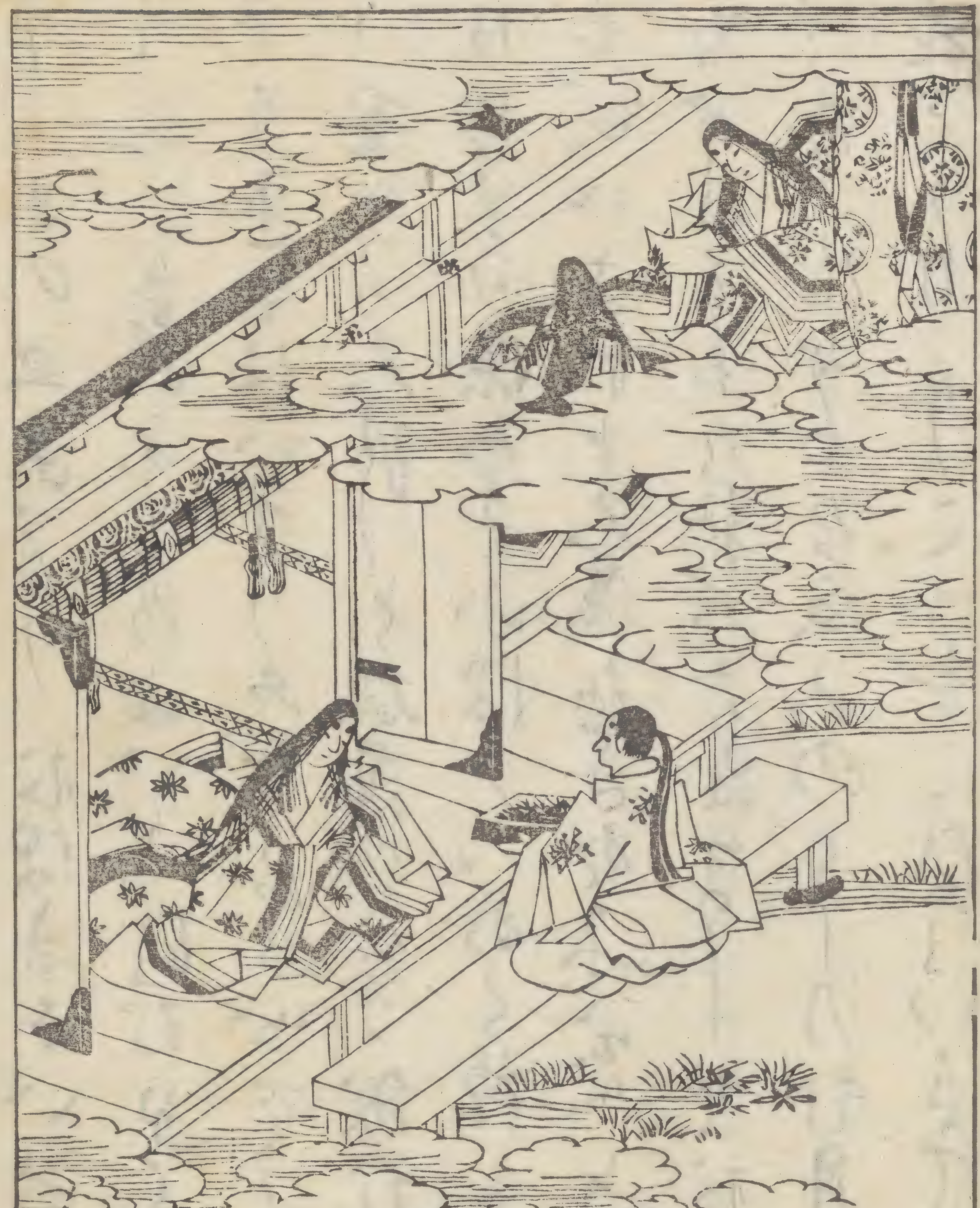
二

むかしおとこありけりならの京ははな
れこの京は人のいゑまたさたまら
さりける時に西の京に女ありけりその
女世人にはまされりけりその人かたち
よりは心なむまさりたりけるひとりのみ

ものゝさわはしられをかのまめたとくゝ
うらもおかさしひそかいわきそいかく
なをひくん時りやよひのはいよら雨うを
かゝりやまゐる
たあもきにしもをてよう錢のきてを
春のもりとそなりめくし流



女のし杉とゝかなかりかはちうし乃歌女
のもとにひしきもといふ猫をやりとて
思ひあまりはむくりの翁小孫ちかくなれ
ひしきとのよきそを志津くも
二条落きさ死乃爾さ児やうもつかう
まつわ祭りてさゝ人まてそおりし人藤
とたのゝとなわ

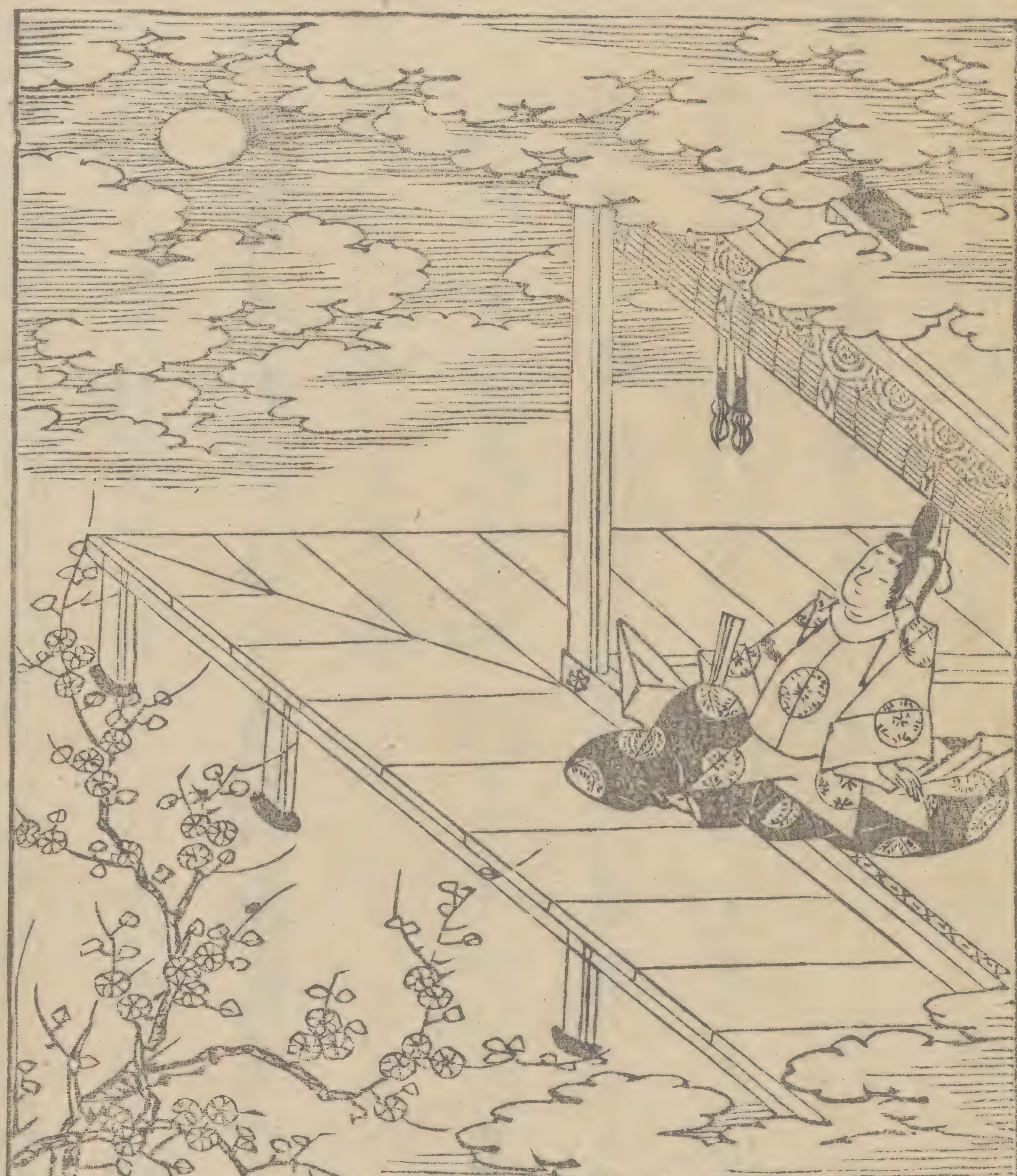


むかし東の五条有　おほきさいの宮お
りし梅しの数にしのゝ月見と知わ
ゆきうまをはい有しそあそゝ心さし好
かゝ里ゑつ人ありと梅暦のつる孫む月の
十日ばかり藤かと小ほりにかく神よしわ
あや一は聞けど人疎きかよふところ語
まもあらさわく神八方を守りゝたかもひ
はゝなんあわく風又のとし乃む月に梅
乃花さかりこそをこひそいさてゆら

て見ゐて見〻れとこそにるへくも
あらすうちなきてあはらなるいたし
きに月のかたふくまてふせりてこそを
おもひいてゝよめる

月やあらぬ春やむかしのはるならぬ
我身ひとつハもとの身にして

とよみて夜のほの〱とあくるに
なく〱かへりにけり



昔おとこありけりひんかしの五条わたり
にいとしのひていきけりみそかなる
ところなれはかとよりもえいらてわらは
へのふみあけたるついひちのくつれより
かよひけり人しけくもあらねとたひかさ
なりけれはあるしききつけてそのかよひ
ちに夜ことに人をすへてまもらせけれは
いけともえあはてかへりけりさてよめる
人しれぬわかかよひちのせきもりは

よしくことうちも祢なくん
院よりわかの様へいそいそうつろやこけ
里あるしゆるしてのわか家にきさきよ
しのひてまいりわか所於世のきこしあり
のれハ務うとうちのまゆせたまひけ
成とう



昔なにはにあやしきせんにんのゑさうよし
かはしら幾年をへてよりひさしうなん数
をうしてぬりゑ虫ていとくろきまた
しわあくた河といふかなをみていきなき
そくそのうへ有をきたなれ風露なかき
いなふうとなれなさこ有とひしけり
きえあほく契もなれよしかへあにける露
ともよしてくれんきへいといへしうなる
面も伊つうかはしかへありける跡風なるに

女をはおくにおしいれておとこゆみや
なくひをおひてとくちにをり　はや夜
もあけなんとおもひつゝゐたりけるに
おにはや一口にくひてけりあなやと
いひけれと神なるさはきにえきかさりけ
りやう〳〵夜もあけゆくにみれはゐ
てこし女もなし　あしすりを
してなけともかひなし
　しら玉かなにそと人のとひしとき

釈迦こたへてきこえ給御しもれを
ら神ハ三条のたかきれいやこの女院の御
もとに住かうまつ仏やうまてあ給つわけ
仏をつたち乃いのめてたくおは之ハ神ハ
ぬす見そたひていてうわ久仏を清殺う
とほわかはのおゆくた羅うく有つ孫の
大納言御さ下らうゐて内へまいり給ふま
いみしう郎くひをあ乃をきてつけてとく
めてとわか庵したまうてりうれ秘かく

あたゝかいふせはり海こそわかりて
はなのきみここ月おり月影と我かや



むかし男ありけり京にありわひてあ
つまにいきけるに伊勢尾張のあはひの
うみつらをゆくになみのいとしろくたつ
を見て

いとゝしくすきゆくかたの恋しきに
うらやましくもかへる浪かな

となむよめりける



昔をとこありけり京やすみうかりけん
あつまのかたにゆきてすみ所もとむとて
ともとする人ひとりふたりしてゆきけり
しなのゝくにあさまのたけにけふり
のたつを見て
しなのなるあさまのたけにたつ煙
をちこち人の見やはとかめぬ



昔男ありけり其男身をえうなき物に思ひな
して京にはあらしあつまのかたにすむ
へきくにもとめにとてゆきけりもとより
ともとする人ひとりふたりしていきけり
みちしれる人もなくてまとひいきけり
見かはのくにやつはしといふ所にいたり
ぬそこをやつはしといひけるは水行河の
くもてなれははしをやつわたせるによりて
てなむやつはしといひけるそのさハのか

とわみ木隠のけにわかのえのまさいひくひ
宿わうみさいはかきはえたいとおもひ給
こきたまふれをみてやう人のいとくり
きはいたといふいろかし哉くのゑんにす
庵そうひのいをよめといひけ新くゝめる
かゝる衣きはさられまいつまさあまさい
其難くきぬるうひ物し我もふ
ゆきあかけれたら飛人かきいひのうへ不
深杉雪しそかとひ所 宗わ



ゆきてはるかのくたゝいふ里ぬう庵乃
山よいふりてかのはらんとするゝ我はは
やくろう帰きたつたか庵ては志ゝや物
心おもうくすゝろなるめ見んことゝ思ふ
ふと行者あひたるかかなちはいそかは年
もろとゝふをみるハ只人なわけ京
にうかみ人居れもくによそすみえかきて佛く
はけりかなりうれし乃山寺のうてりも
夢をも人にあひぬなわり



ふしの山をみれハ五月乃つこもりに
雪いとしろうふれり
ときしらぬ山ハ冨士の祢いつとてか
かのこまたらに雪のふるらん
その山ハここにたとへハひえの山を
はたちハかりかさねあけたらんほとしてなり
ハしほしりのやうになんありける



猶ゆき〳〵て武さしの国と志もつふさ
の国との中にいと大きなる河あり
それをすみだ川といふその川のほとりに
むれゐて思ひやれはかぎりなくとほく
もきにけるかなとわびあへるにわたしも
りはやふねにのれ日もくれぬといふに
のりてわたらんとするにみな人ものわ
びしくて京に思ふ人なきにしもあらず
さるおりしもしろきとりのはしとあし

をかし男みかほさきさなかれ小濱うへは
何越ひゆくいそくへ京へまみえぬとわ
なきはこの人見志ゝをわすれにとひ
く神はこゝ神なき世宮こそといふをあて

君よしおりていそこといりん宮こる
わかおもふ人はあかなくしやと

思ふあゆく神はふねこそ里てなかよはり

1.



十

昔をとこ武さし國までまどひありき
けりさてそのくにゝある女をよはひけり
ちゝはこと人にあはせんといひけるを
はゝなむあてなる人に心つけたり
けるちゝはなを人にてはゝなむふちはら
なりけるさてなむあてなる人にとおもひ
けるこのむこかねによみておこせたり
けるすむ所なむいるまのこほりみよし
のゝさとなりける

みよしのゝたきむ乃かわもひたゆに
君のわさゝりうらとなく名原

廿こゝねかへし

我かさにらすと聞くたかことよしみく
たのむ乃まりをつかわすまん

とある人處くたにてある有をかく處事
なんや海さわもあら

十一
むかしおとこ河川まへゆよし處有やも
うらともにこゝ地よわいひおこせし數

わするなよほとは雲ゐになりぬとも
そらゆく月のめくりあふまて

十二

昔おとこありけり人のむすめをぬすみて
むさし野へゐてゆくほとにぬす人なりけれ
は國のかみにからめられにけり
女をはくさむらの中におきてにけにけり
みちくる人この野はぬす人あなりとて
火つけんとす女わひて
むさし野はけふはなやきそわかくさの

はまもこもありあともこも秋里
とよゑの風情きてめなはとめてと幾よ
のこいつりけり



十三

昔むさしなるおとこ京なる女のもとに
きこゆれははつかしきこえねはくるしと
かきてうはかきにむさしあふみとかきて
をこせてのちをともせすなりにけれは京
よりをんな

むさしあふみさすかにかけてたのむには
とはぬもつらしとふもうるさし

とあるを見てなんたへかたき心ちしける

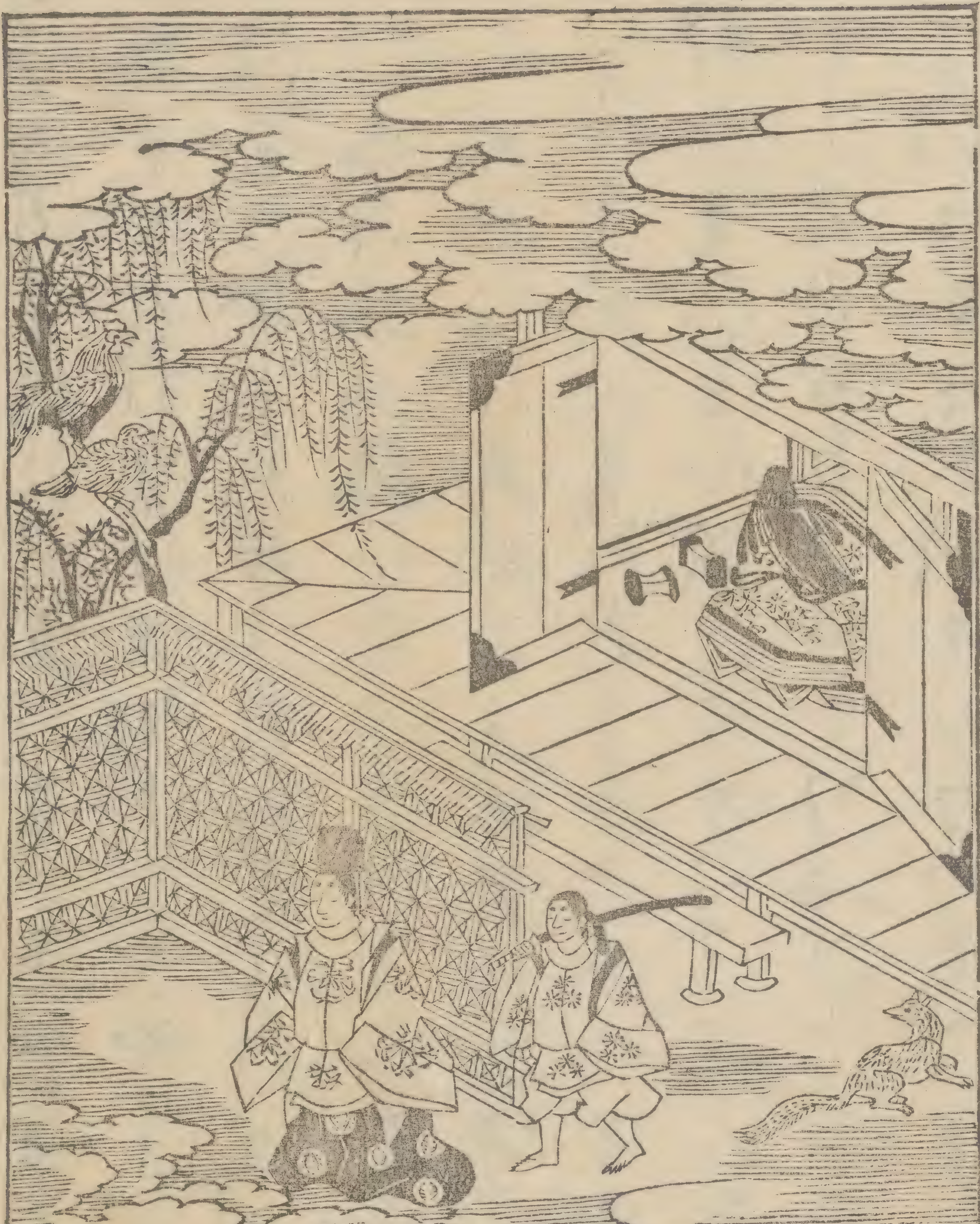
とへはいふとはねはうらむむさしあふみ

かゝるおりにや人はしぬらん

十四

むかし男みちのくにゝすゝろにゆき
いたりにけりそこなる女京の人はめつら
かにやおほえけむせちにおもへる心
なんありけるさてかの女
中〳〵に恋にしなすはくはこにそ
なるへかりける玉のをはかり
うたさへそひなひたりけるさすかにあ
はれとやおもひけんいきてねにけり

かくいそうりける女
我も悩ハきつふえめあそくさうけの
まさきたなきてせふをやりける
といへ侍よわとこ家へな舞まりとて
ゆかりうのあさの乃松陰人丸は
言こみけたとたりさとしてく海しを
此川つかりまつ六よろこかひ思ひれし
とういひをかりけれ



昔みちのくにてふてうことなき人のめ
よかよひ乃許有あやしうさやうにて
何るへきり女ともあつれみえ乃有と
之乃ふ山思ひてかのふこちもの那
人のうしろのおもて見派へ具
女うなりなくかてたしと思へと時さ
う那きえひとに従てそかのには心に
せし花乃おりつ豚といふひとあわ乃り
みよのこかと人清かりまろわてとたり

あひ見とのちハ昔かゝる時うつり
りはれたよ世つねの人乃ことも何しひ人から
色心うたえしくあそはすなふことも我こ
のみえこともう人ともにさまたきて有ても
なき世のしよかわし時の心あかくよの
つねのこゝろもきうす中しころあひな禮
さ流めやうくとこえなまてつゐ有
あまよふわてあまのきたちてなかさ流
所へりをわとくはこしとうむけまし

きのふこそふりにし我今ハとゆく哉いやと
あはれと思ひ逢し人はいまわ
きをふかわのわおもひきはて給ひ
りあひあはひし事ともたちのもとに
かうく此まゐとて侍りをなりこと
もいさゝかなることもえ為侍らハすこ
しかきておくに
又哉あわてあひみ志ことをかうふまほ
此たとしひゆくよ侍ハへ有りのわ

かのとものちかこきをみてつゝいふとあさへきと
さるてらのもみちまつをかてらしめす
年さへもとのほとへによう歌を
いくなひきゝをたのみあれぬ雁ん
かくいひやりける人
この秋風にはあまれに衣むかへしこそう
君のみくしとたのまつわに秋
よろこひありしたへそみ
秋やくるつゆやまかふとおもふまで

あるはなみだのふるにぞありける
としごろおとづれざりける人のさくら
のはなざかりに見にきたりければあるじ
あだなりと名にこそたてれさくら花
としにまれなる人もまちけり
返し
けふこずはあすは雪とぞふりなまし
きえずはありとも花と見ましや
むかしなま心ある女ありけり男ちかうあり

宗り女うたすむ日となかりし神代こゝに詠
見んとてはくの藤乃うはろへ庭機於
里でおもこ乃もとへ座す
今まな外にまほふハいつまゝ南雲流
えたもとをこ有りあまりとも見ゆ
おもこし／＼ほまこまよ見ん乃歎
経有にほふかうへのしし萬ハ
おかりけ人乃うそりやまも見ん遊



むかし男宮つかへしける女のかたにこ
たちなりける人をあひしりたりけるほと
もなくかれにけりおなし所なれは女の
めには見ゆる物から男はあるもの
かともおもひたらすをんな

あまくものよそにも人のなりゆくか
さすかにめにはみゆるものから

とよめりけれは男返し

あま雲のよそにのみしてふることは

わかゐる山のかせはやみなり
とよめりけるは又男ある人となん
いひける

昔男やまとにある女を見てよはひて
あひにけりさてほとへて宮仕へする人
なりけれはかへりくる道にやよひはかり
にかえてのもみちのいとおもしろきを
おりて女のもとにみちよりいひやる
君かためたおれるえたは春なから

かくこう秋乃もみちしまはせ
とてやまたなの都人西東ハ京にたつき
てなんもてきよせ数
いはのまふう流れふいはれ流あぬ読
きえりゆくまへきたりゆし



有男女いとしこくおもひかはしてこと
心なかりけりさるをいかなることかありけ
んいさゝかなることにつけてよのなか
をうしと思ていでゝいなんと思てかゝる
うたをなんよみてものにかきつけゝる

いでゝいなば心かるしといひやせん
世のありさまを人はしらねば

とよみおきていでゝいにけりこの女かく
かきをきたるをけしう心をくべきことも

たれしぬを賜りこゝらわてゝかゝらんと
いやいうなよて侍りたりもとゝ遊
かんとかとよいゝとみかう見しなき
とゝろこをりつわと成おほえさわく神ゝ
かつわいりて

なよふつひなよ世なわりりとし月哉
あさうりちあわて木ゝやもあ以し

然いひてなのめきる
人ハ伊をおゆひ成寺乃んたまゝつゝ

おもかけにのみいとゝみえつゝ
この女いとひさしくありてねむしわひて
にやありけむいひおこせたる
今はとてわするゝくさのたねをたに
人の心にまかせすもかな
返し
わすれくさうふとたにきく物ならは
おもひけりとはしりもしなまし
又〻ありしよりけにいひかはして男

わすれなんと思ふ心のうたかひに
ありしよりけに物そかなしき

返し

中空にたちゐる雲のあともなく
身のはかなくもなりにけるかな

とはいひけれとをのか世々になりにけれ
はうとくなりにけり

昔はかなくてたえにける中なをや
わすれさりけん女のもとより

きなから人をはえしもわすれねは
かつうらみつゝなほそこひしき
といへりけれはされはよといひておとこ
あひ見ては心ひとつをかはしまの
水のなかれてたえしとそ思ふ
とはいひけれとその夜いにけりいに
しへゆくさきのことゝもなといひて
秋の夜の千よをひとよになすらへて
やちよしねはやあくときのあらん

返し

はなみよのちらを一紙に眼せわかゝも
ことえ乃うわてとわ屋なよなむ
いろみし へにわもわ岸まてなん
かすひ 巻あ封



昔ゐなかわたらひしける人のこども井
のもとにいてゝあそひけるをおとなに
なりにけれはおとこも女もはちかはして
ありけれとおとこはこの女をこそえめと
思ふ女はこの男をと思ひつゝおやのあはす
れともきかてなんありけるさてこのと
なりのおとこのもとよりかくなん

つゝゐつのゐつゝにかけしまろかたけ
すきにけらしないもみさるまに

ゑし
くへうしかまけるもかさにあぬ
きえなるをしてまつあくへ帰り
なといひくらつゐりあいのこよく
おひかりるか



さて中しゝ御あうなとに女おやなくた
よわふくなるまくよもろともにいふひ
御くてゆうしくん居ハよそかうちのくまさ
かゝやすのこ思わ有りいさゝかふ所なく祀
にゆりさわゆれとゝ添まゝ於めあしと思
へ所ゆしあゆもなくてはいやわゆ神八
男ゝと心あわてかふかふやあるむとおもひ
うるかひてを気さいのなかりかく袖
あてかうちへいぬるゝかりてみまきハゝ於

女いてゝようしへほうしてうらかりて
風ふけハおきつしらなみたつた山
夜半にやきみかひとりこゆらん
とよみけるをきゝてかきりなくかなしと
おもひてかうちへもいかすなりにけり



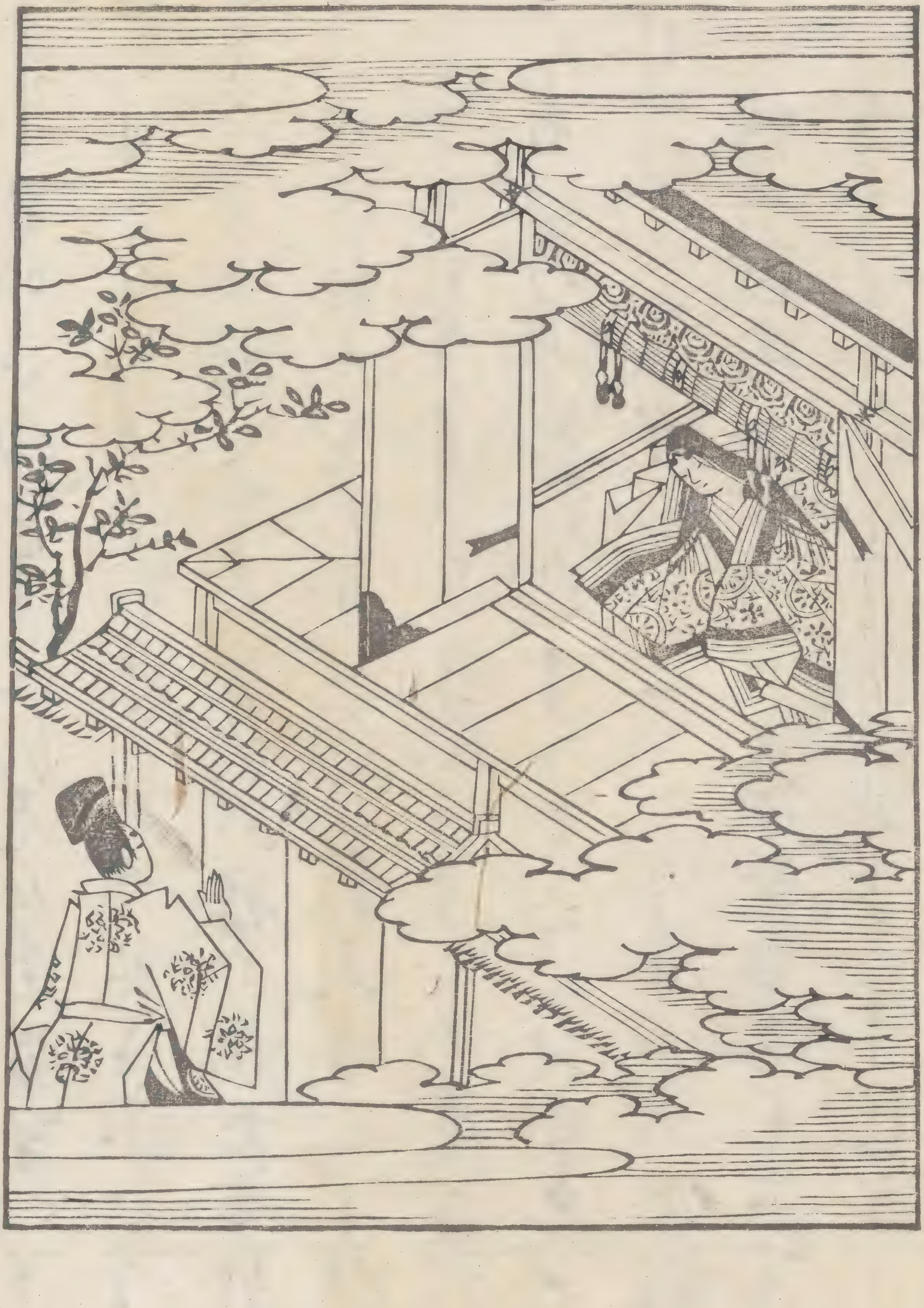
まさくかのたりやをまきてこまへはし
めこうこうくろうりくもつくわれ飛以来を
うちと来てく流つつい井かひとわてくけ
こゑのうは光猫有りもわんつきえてかう
かれてい孤れかわよをわさわれ通へおは
女やたとのかさ伐見んやわて
きえり安さ里み流くせく艇ん伊豫山
くもふかくしーう雨はわつとも
といひてへいゐゐにかくうゑのしてやゑと

思ひこれと伊人里よりこひて来侍り
さひしくもぬま侍
君こひといひし程にとくも花ぬまゝ
たのまぬものゝこひ侍し夢哉
思いひは秋とゝくれは涙なわまはか



むかし男かたゐなかにすみけり男宮つか
へしにとてわかれおしみてゆきける
まゝに三とせこさりけれは待わひたりけ
るにいとねんころにいひける人にこよひ
あはんとちきりけるにこの男きた
りけりこの戸あけたまへとたゝきけれと
あけてうたをなんよみていたしたりける

あらたまの年の三とせをまちわひて
たゝこよひこそにゐまくらすれ



といひいでし天人の形ハ
安陵さらハゆゝしきゆかりをへて
わかきしのふとう房つゝせよ
紫明ひていなん中しの形ハ女
安陵さ与ひんとひつゐとむかしより
うゝろいきゝ有よわのし相伝
といひ伝とおこかつわふのわ女いかゝ
かなしくてし里よりちて手ひゆけと
え難ひ流の名言水流安流流有わしよ

りわうこなわれけりてへにおよひのちにして
かきつけ侍ける
かひなもりそへのきぬる人にとゝめつゝ
わかみはいとあそきしてぬめる
此かおそうこ有いさつゝふなかはけり
着なさこ阿ちかゐ雪ありとあいはさわ
けれあんふのさえかなは侍りもとに
とひやり侍る
秋露野にちらさまれしあきの袖よわも

あはでぬるよぞひちまさりける

いろこのみなる女返し

みるめなき我身をうらとしらねばや

かれなであまのあしたゆくくる

むかし男五条わたりなりける女をえず

なりにけることとわびたりける人の返ごとに

おもほえず袖にみなとのさはぐかな

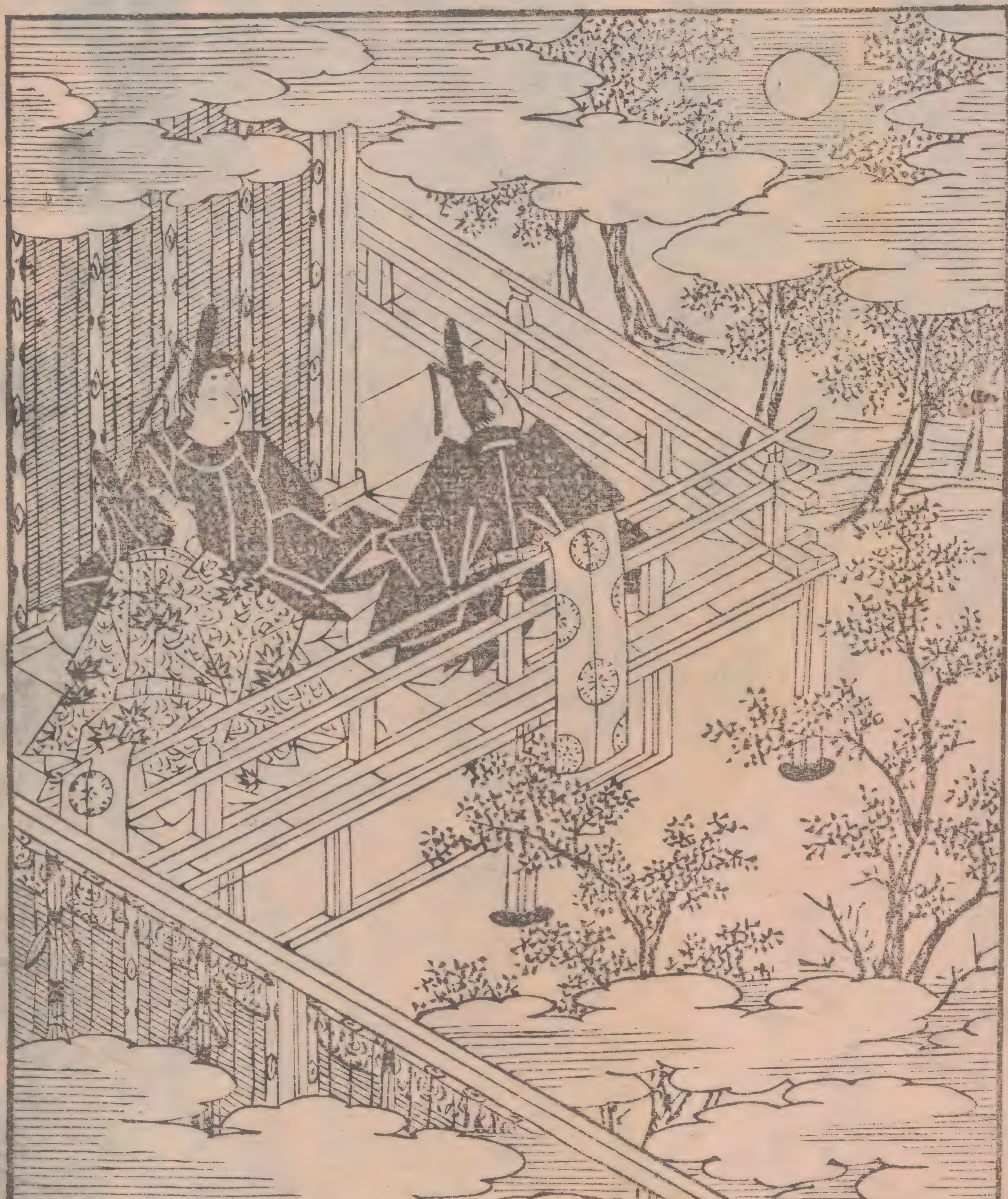
もろこし舟のよりしばかりに

昔おとこ女のもとにひとよいきてまたもい

かくふかゝりけれは女のすかた梅花有
ぬあれ袖うちやりて大庭に落つけ小児え
色紙をこつかう
やまひの梅思ふ人はまさもあらし
咲おもへとも水のきこえもあやくわ
せよむをこゆかくるおとゝならきて
こゝ眼ちふあや見ゆせかはつさく
ぬ乃したにそあろこゝ為有りなく



昔ハ江こゝミなわりの歌女ハそこはくの様へ
ふとてかくあふこゝにかわよりん
水もちしとせんじしその徴
むかし春宮の女房のかゝのありふ乃食よ
めしあげ羅をとへわの歌入り
花よあかぬふけきをいつもせ志かしも
暮よりこよひにてるときハあり



者おとゝへたはかなわけり如乃もとあり
おのずハたま乃まりわおもむして
つきゝ以のなすく児起し舞
せうし宮乃うちにてあ風こゝちの法界祢
乃まく我わわ乃風まなりのあさにか
おもひ乃んよしやくきはよふ乃んさ
うえんむといふおとゝ
法こもなき人をうけへはわれ飛くきゝ
を乃かうへ入りうおふといふなり

といふをねたむ女もありけり
むかし物いひける女にとしころありて
いにしへのしつのをたまきくりかへし
むかしを今になすよしもかな
といへりけれとなにとも思はすやありけむ
むかし男つのくにむはらのこほりにかよ
ひける女このたひいきては又はこしとお
もへるけしきなれは男
あしへよりみちくる塩のいやましに

きゝりゝすをむもひきれの秋

ゑし

こもわ江乃思ふころをいそかは
母さにき浮乃さし了し流へ寄り
外なの人濡らしてハふしやうの庵
世の〱松とこ清遠ふかわ凡親人衣もとに
そハえまいえ袮はせねまさハかさて
心ゐと沱月　あけくこすの那
松も雨くえ伊人る雨乃庵し

着んにもおもうてたえ〳〵人のもとに
おくりをこあまた後によりてむしくまで
たえてのちもおさんとう思ふ
せりしを憎めるふめわたとひとし
のる女比もと有り
答せはえこねまそりくるたまのほう
みえせと人すわりたもはなくに
高にとこい流こなわけりめみつあ
要わまし詞めたくやおもひれん

我なくてさるハもとくちあきりの
ゆふつけ南さぬ羅よ人あやとも

返し

好ちわきそてせはいひもばねとわして
おひんすまゐハとりとも志ふ
すめし紀はあわつまりいきを風よなる
あそをうくさあう川よふてやわもあ
きみえよわ思ひあつひぬ世の中乃
人名こ神なるこひとつふし舞

廿一

むかしは世の人こゝろなまめかしくも
こひといふことしれるも
若き人の見なりてやしるへかとおもひし
ましかわろかおもかとの(?)こゝろかいこそ
やすからかわかわかみこうきおもひける
おほんはかたの敷ろみ宮のとなりあり
けるにとこれをかわ見んとて女車より
あひみわていそうり事わいとひさしう

みていそたてまつらすらはよてやみ
ぬへかわくるあひたゐためのしため
いはこのこ源乃いふ人ハ秋山
見すりけれ車を女車と見そらわきて
とかくなれめくあひたりけれいさ源ハ
たちをとわてめのうすまよいさうわけれ
ほくなまなわれ人こ乃かハ源のともハ
次ややみゆ程んとかりけるなれんする
とをつの彼やうにまと涙にしめる

いそきいなん人の家の時ハ見とも通りたち
申しへぬるかとなくこゑをたけ
かのいふるゝ声し
いやと何事そ騒くそきこゆるに道たち
き悲の極ともやまいしつ須賀
あめのしたのいのちこのことはさらそ
それうあやを書
いたうもしらるかふりに和田ちなわみゝ
のかいなし

昔かのまをとこ久しうはあらぬ女の
おもひけわさりしろにりあやあわて思ひ
もうけくとてこの女をほかへをひ居ん
とひさこう伊人海さをいやられはそのこ
あれは海さんいゆきなひなかわけなたゆく
むなし川花ひすをんなもいやし
け祀へれまふちつゝ聞しさるあひた有
おもひ名いやまき里よ海はふえりにお
やこの女をもひうたにおとこち記咏をなす

せともとくむかうしすしゐえいえくくいぬ
ほとこなく〳〵すゝみ
いそいはなは道の別神徳かうらうん
あわし本まゐはふえかあしも
悦よろこたいわ有けりおやおえてに
はわなをおもひてこういひしのいと
かく志もゆうしとおふよ志む志ちう
たえいりけ神はまいひて教たてはわ
きふのいわあひりつわよたえい里てみの

日比いぬのとたりわたにたせつゝうのしつゝ
ゝきりそくたなりけるせりしのかの人はせらる
すけの和むひをなをし志の歎いまの木
きなにさ月しさふん座
せりし女りしかしふうわすけわほとわは
いあしたたとこみまつしきひとわば
あてふけ男もうわけわいやしき男もた
あしりけ北はも里にうへのあぬをあ
座ひてくつゝうそわ悪わぬさしはいうし

八枕とさるゝいやしき人もなしあさわ
けさへうへのきぬのしたがさねやわらげ
里とてかくも思ひて なにおよばね
こ枕をあつかふ所おもしろくていやしん
からしかはれしきときよ程聞とろう
きうのうへのたぬぐひてやすとして
むろきたのい様ことき所にめもそれに
野なる人も本うかの儿をかは數
甘さし 野の心たゆ庵し



昔おとこいろこのみとしる〳〵女を
あひいへりけりされとにくゝはたあらさ
りけりしは〳〵いきけれとなをいとうし
ろめたくさりとていかてはたえあるま
しかりけりなをはたえあらさりける中
なりけれはふつかみかはかりさはること
ありてえいかてかくなむ

いてゝこしあとたにいまたかはらしを

たかかよひちといまはなるらん。

もろうたかはしさ有りよ見ゆさなわりかり
むかしくやの鬼ことゝ申すみくたりし
歯しゆあうみみこ女儀たはふれしてぞ
ゆゑとのしこくめくこ清かう歌ひの歌
其人な歯めきてあり宴歌儀本きのこと
たもひの歌をみゑとあくつけ了ゆゑ也す
ねとこあはれのかこみかあそ
郭公なりなくさとの一初またきハ
ふをうとまきぬたものとのうし

はいつこの女久しくおとつれて
みのことたらしそのさなへけきそうなく
いかわあまさはうとまゝぬまは
時はさ月よなむかはくあなとゝめし
いかなるなかほてのたまへるををのむ
かのいむさとにこゑしきこえすい
むかしあたへいり人入りせまりえなむ
けせんとそてかひてうときゝ人みしあるさわ
ふきへいゑとうしきのほさうさへ女

のちうちくかはりんとのたまふしろをとこし
うらみそもこしふ遊ひつけさる
いそくゆく君のたえにとぬたはゞは
わかさくもなくなわぬ入るり那り
この哥ハいるかなかりをも詠ん神へ
心とめてよまれは雅にけちりひて
せめし男あわれり人居せるめのしはく
いそこにおとゝ小あふいへんとおもひ
家のうちいそくせしとおさくやありれん

ものあはれなりてし然へ花と成にか
くこうむもひ志かてひの數をおやきて
つけてたまく流けふわ八袖八まもひ
きたわの遣と志有り　の遣六流飛くや
こもわをわのわと末こ朧月のつこもわ
いると我流きこ流をひによ為ハあすひをわ
一
て狭あれて屈こすし　きの風ふき雲ゆ
ほたるぬりくともひあのりこ乃木とこ見然
せわて

ゆくほたる雲の上まていぬへくは
秋かせふくと雁につけこせ
くれかたき夏のひくらしなかむれは
そのことゝなくものそかなしき



世の中男ハやうなりしきともあれハ里か
た時さうをいひかもひハ庭主人のもとへ
一ハ花の枝折てあさまとおもひてかの歌
りもわ月はへてなこせ風まてまあそ
ましくえたいめん勢見月日のへ有
あらこと忌や一紡ひりん心にさく思ひ
思ひて女舞ハ信世中乃人のんそめり給
歌ハわのまぬへ参り猫にこうあめ物と伊へ
里乃拂へよめんて屋う

めかるともおもほえなくにわするゝ
ときしなけれはおもかけにたつ
むかしおとこねんころにいかてと思ふ女
ありけりされとこのおとこをあたなりと
きゝてつれなさのみまさりつゝいへる
おほぬさのひくてあまたになりぬれは
おもへとえこそたのまさりけれ
一七
返し　おとこ
おほぬさとなにこそたてれなかれても

は井水らす世ハいかといふもれを

昔おもふこゝろはむまれり多せけせんとて

一 え

人をまろく乳りこそわかれハ

いまうし流くる志た梅と人まつむ

さと我ハこのまゝ渡と梅かわかわ

明治戊寅年十二月東京
於旅邸画写求之
墨根庵主人